この道三十年

――文筆生活の心得――

城山三郎

私は、一橋という経済の学校を出ましたから、文学をやっている仲間や先輩がほとんどいないんです。もっとも全然いないわけじゃなくて、たとえば一人、伊藤整さんがいます。伊藤さんは、私が文学界新人賞をもらったときの選考委員の一人だったんですが、先輩であるにも拘らず反対の票を投じて私は落ちるところだったんです、三対二でしたから……。そこがかえって文学のいいところだと思いますね。私は文学界新人賞と直木賞と、全く作品だけで評価されていましたから、そういう意味では、文学というのは非常にフェアな世界であると思います。誰も知らなくても、いいものさえ書いていけば必ず認められるということを自分で体験しました。だから私自身が直木賞の選考委員をやっている時には、つとめて、作品だけに限って選考する、その人のつながりとかは一切考えないということで選考してきたわけです。

伊藤さんは賞をもらったあとで、はじめて、自分は先輩だから、一つだけあなたに忠告をすると言われた。それは「これから先、あなたは、いつも自分を少々無理な状態のなかに置くようにしなさい」という忠告です。極く簡単なことですが、このいつもというところが大事です。そして少々無理な状態なんですね。ただ自然の状態では伸びませんし、極めて無理な状態では続きません。

その後知った私の非常に好きな作家の一人に田宮虎彦さんがいますが、田宮さんがこういうことを言ったんです。たとえば、皆さんたちが小説を書いて、私なんかのところに持ってきて、作家になる才能があるかないかきかれた時に、一つだけ言い返す言葉がある。それは、あなたは毎月五十枚ずつ小説を書いていますか、毎月ずっと五十枚ずつ書いている人は作家になる才能があるって言っていい。この前の冬休みには六十枚書いたけれども、それから後はインスピレーションがわいてこないので書いていない。そういうムラのある人は作家になる才能はない、そう返事をして大丈夫だっていうんですね。

たとえば夏目漱石の文学論なんかを読みますと、作家っていうのは、インスピレーションがわいてこないと書けないとはいうものの、作家にとってインスピレーションというのは人工的なものだっていうんですね、漱石は。作家にとってインスピレーションというのは天から降ってくるものじゃなくて、自分で創り出さなくちゃい

けない。それには続けて仕事をしていないとそういうものは湧いてこないっていうんです。

毎月五十枚ずつ書くというのは自然の状態では書けないですね。やっぱり少し無理しなくちゃいけない、でも大変な無理ではないわけです。それを毎月、ずうっと続ける、そうすれば才能があるといっていい。「持続は才能の別名」という諺がありますが、やはり持続しないと才能はつかない。そういうことを伊藤さんは言ってくれたんです。これが一つの心得っていうか、ポイントだと思います。

それから大岡昇平さんという作家、この人は大磯に住んでおられましたから、時どきお会いしてお話したことがあります。私のように茅ヶ崎にもう三十年も住んで、住んでみると悪いところじゃないし、代りのところを探すのが面倒でしょうがないから、結局そのまま住んでいるわけですが、そのかわり東京へはほとんど出ません。文壇づきあいは全然ないといっていい。そうすると、つきあいがなくていいだろうかと誰もが心配するんです。編集者も知らないし、仲間もないし、それで文学がやっていけるだろうかという心配を持ちますが、そういう編集者とのつきあいとか、文壇づきあいをどういう風に考えたらいいかということをいつか大岡さんに聞いたことがあるんです。

そうしたら大岡さんはこういう返事をしたんです。ご自分も長い作家生活をしておられますが、まわりを見てみると、いわゆる文壇の人間関係に気を遣った男も、気を遣わなかった男も変りがないっていうんですね、何十年か経ってみると。つまり、ものすごく気を遣ったら出世したかというとそうでもない、気を遣わなかったから駄目だったかというとそうでもない。要するに残ったのは、いい作品を書いた人だけだというんです。だから変に人間関係に気を遣わないほうが得なんですね、遣っても遣わなくても同じことなんですから、遣っただけ損します。それよりも、そういうことを考えないで、いい作品だけ書けばいいということですね。そういうことを大岡さんは自分の体験や見聞のなかから言ってくださったんです。もの書きになろうとすれば、やはり人間関係をどうするかということに気を遣いますが、それよりもやっぱり作品の方が先決、いい作品を書くということで必ずいつかは認められるという、そういう世界、そこがやっぱり文学の、ありがたいっていいますか、いい点だと思うんです。テレビなんかみたいにすーっと消えてしまうのと違い、活字になって残っているわけですから。

それから、私は経済のことに詳しくて、経済小説をはじめ創った、経済小説家っていわれましたが、本当は困るんです。小説を書くのが作家なんで、その小説に「経済小説」なんて括弧をつけられるのは困るんです、小説家は小説家でいいんですね。また、たとえば現実のいろんな会社の出来事とか、内幕とかそういうことに非常に詳しいという風にいわれたんですが、私が専攻した経済学というのは極めて抽象的な経済学で、どこの会社がどうのなんて話は全然出てきません。国全体のバランスがどうなるかとかそういうことをやる学問だったわけですから、全然役に立たない経済学です。にもかかわらず、まわりは、あれは随分経済に詳しいという話になるんですね。

そういう話をしたときに、伊藤整さんは、私が他の作家と違って経済のことをこわがらない、億劫がらないということがあなたのプラスになっているっていうんです。そういう自分だけの他の人ので

きない領域をもつということが、もの書きとして生きていく上に非常に大事なことだと思います。その人でなければできないような領域を持つ、あるいはその領域の第一人者になるようでないと駄目なんですね。ただ小説らしいものを書いたというのじゃなくて、テーマとか捉え方とかに何か新しさがあって、しかも、この世界を書かせたらあれにはかなわないという、そういうものを何か一つ持つ必要があります。レッテルを貼られるとよく言いますが、まずレッテルを貼られるようなそういう領域をしっかり持つということです。その上で他のことをいろいろやるということです。

それと同時に、私はよく調べに歩きました。小説というものは、普通は机にむかって腕を組んで書くものだという考え方もあるわけですが、私はつとめて調べるようにしたわけです。今になってみますと、やはり調べるということは非常に大事だったってことですね。自分の足で行けるところは行き、聞けるところは聞かなくちゃいけない。助手を使ってやらせる人もかなりいましたけれど、そういう人は消えて行くんです。こういうことを調べてくださいって人に頼んで、その人が聞いてくれた速記原稿に読んでわからないことがでてくる。相手はどういう顔でしゃべったか、あるいはどういう雰囲気でしゃべったか、そういうことが意外に大事になってくるんですね、ですから、つとめて自分で行かなくちゃいけない、私は助手を使わないで全部一人でやって来ました。

ゲイ・タリーズというアメリカのノンフィクションライターの第一人者がいますが、私はニューヨークで彼に会っていろんな話をしたことがあります。『汝の父を敬まえ』とか『汝の隣人の妻』とか、彼は大変なベストセラーを書きましたから、アメリカで随分問題になり騒がれた作家なんですね。かなりきびしい批評もされたんですが、そういうものをどう思うかと聞いた時に、彼は、書いたものについてどんな批評をされても仕方がない。それに対して書き手が言えることは、“I was there”〝確かに自分はその場に行きました。自分自身が行ってそういうものを調べてきました〟そういう答え方ができることだというんですね。

最近出た双葉山のことを書いた本を読みましたけど、これは女性のライターが書いたものです。双葉山という非常に強い横綱がいて、生涯童貞であったんじゃないか——結婚しているんですからそういうことはあり得ないんですが——といわれるくらい純粋に見られた人なんですが、実は大変な女性関係があったということを、その女性ライターは聞いてまわるんです。私たちだったら聞けないようなところへどんどん踏込んでいってきいてまわってるんですね。そうすると、それはそれなりに迫力というか説得力がでてくるんです。彼女自身がほんとに歩いているわけですから。ただ見方については、私なんか異論がありますけれど、とにかく歩いているということで評価できるところがあります。骨惜しみしないで、自分で歩かなくてはいけないということなんですね。

私が文壇に登場した頃、編集者からよく言われたことですが、小説家になりたければ、当分の間小説以外の事を書いてはいけない、テレビに出てはいけない、つまり自分の世界がしっかりできるまでは、テレビに出たり、雑文を書いたりしてはいけない。とにかく自分の世界をしっかり造ってからにしなさいと、編集者たちにきびしく言われました。これは非常に大事なことだと思うんです。私はそれをある程度守って、テレビにはなるべく出ないようにしよう、小

説以外のものは書かないようにしようと最初のうちはずっと続けてきたわけです。ただ、今は逆に行く人もあるんですね。テレビから出て小説を書く人もいますし、いろんな人がいるので何とも言えませんけれど、いずれにしろ、自分自身の世界をまず造ることが大事、その上でいろんなことをやりなさいということだと思うんです。

人生を生きていく姿勢みたいなものは、もの書きになろうともの書きでなかろうと、あまり変りはないと思います。私が最近訳した本に『ビジネスマンの父より息子への三十通の手紙』というのがありますが、実業家の父親が、世の中に出て行く息子に対して、こういうことを注意しなさいと三十通の手紙に託して言っているんです。あの中で言っている原理原則は、どんな職業の人でも同じだと思うんですね。一つは、まず何かをしようと思ったら十分に調べなさい。人と握手をする前にその人のことを十分に調べなさい、というんです。その人に会いそうだと思ったら、その人のことを十分に調べておきなさい。なにも知らないで会うよりは、色んなことを知っておいて会えば話がはずみますね。とにかくよく調べなさい、これが一つの原則です。

次の原則は、挑戦しなさい、チャレンジしなさい、ということです。やってみようかやるまいかと思ったときにはやりなさい、絶えず前向きにやりなさい。それで失敗してもいい。人は失敗するたびに何かを学ぶ。人生の最大の失敗は挑戦しないことだ。

三番目は、信頼される人間になりなさい。たとえば遅刻をするというようなことから始まって、大きなこと小さなこと、人の信頼を失うようなことがいろいろありますね。そういうことに注意して、とにかくあの人間は信用できるんだという人間にまずなりなさい。この原則はどういう仕事をしても同じだと思います。

あの本は、息子が学生の頃から書き始めた手紙ですから、結婚という問題が出てきます。どういうお嫁さんを選んだらいいかを、実業家のお父さんは息子に忠告するんです。まず一つは魅力的な女性、魅力的な人間を選びなさい。魅力的な女性というのは、あたたかみのある女性のことをいっているんです。それから二番目には気品のある女性を選びなさい。気品があるということはどういうことかというと、いやしくないということです。三番目には頭のいい女性を選びなさい。頭がいいっていうのはいろいろ意味がありますが、自分のことだけしか考えることができない人は頭のよくない人なんですね、つまり、相手の立場とかまわりの人の立場を考えることのできる人は頭がいいということなんです。そういう女性を選びなさいといっています。

これもどんな職業であれ、どんな人であれ、男から女、女から男を選ぶ場合でも同じことだと思いますが、そういうようなことを三十通の手紙に書いていくわけです。その手紙をみていると、手紙というものの大事さがわかります。だから物書きになろうと思ったら、書くことにつとめて努力しなくてはいけない。つまり電話で済まそうとしては駄目だ、必らず書きなさいっていうことですね。

手紙はいかに大切かということをいろいろな人がいろいろいっていますが、たとえば、向田邦子さんの随筆を読みますと、いくつか手紙の話が出てきます。一つは、戦争中にまだ小学一年生くらいの妹さんが集団疎開で遠くの山奥に一人で行く話です。その時にお父さんがハガキをいっぱい渡すんです。小学生ですから宛名が書けな

いので、その葉書には全部お父さんの住所と名前が書いてあるわけです。裏には何も書いていないその葉書の束をお父さんは妹さんに渡して、「疎開にいったら、一週間に一度このハガキを出しなさい。その週が楽しかったら○をつけて送りなさい。つらかったら×をつけて送りなさい。」

小さい妹さんは山奥の珍らしいところへいきましたから、最初のうちは山の生活が楽しくて大きなマルが書いてあるわけですね。でもやっぱり食べ物はまずいし、つらいわけですから、だんだんマルが小さくなっていって、そのうちバツの手紙に変ってくる。そしてバツがだんだん大きくなっていくわけです。お父さんが心配して、その遠くの山を訪ねていくと大へん悲惨な生活をしているので連れ戻してくるという話が書いてあります。つまり、字が書けなくても手紙なんですね、そういう手紙というものが大事だということをいっているわけですけれど……とにかく手紙を書きなさい、ということをおすすめしておきます。

私はさっき申しましたように経済ものを中心に書いていますから、男性が主人公の小説がほとんどといっていいんですが、女性を主人公に書いた小説が一つ二つあります。一つは失敗作で絶版にしましたから、一つ『素直な戦士たち』という小説が残っているわけです。私は経済界の人たちを中心に書いてきましたけれども、いろんな男をみていると、どうしてこういう男が育ってきたんだろうと考えることが多いんです、いい意味でも、悪い意味でも。そこで、子供を育てる女性というものを私なりに見直してみようと思って、書きました。あの小説の主人公の女性はこういうことを考えるんです。母親の愛情として、子供が自由に育って、社会に出るときに、どんな職業でも選べるようにしてやりたい。それにはどうしたらよいか。銀行員になりたいと思えば銀行員にもなれる。タクシーの運転手さんになりたいと思えばタクシーの運転手になってもいい。大蔵省に勤めたいといえば大蔵省にも行ける。スーパーで働きたければスーパーでも、或いは全部嫌でルンペンになりたいといえばルンペンになってもいい。何でもいいから社会に出たときに全部自由に選べるようにしてやれば、子供は幸せだろうというんですね。

ルンペンは学歴が要らないし、誰でもなれるかもしれませんけれど、たとえば大蔵省へいこうとか、一流銀行や商社へいこうとなると学校は限られてきます。そういう学校を出してやらないと職業は自由に選べないということになる。それには一番間違いのない学校は東大法学部です。これは元はユーモア小説のつもりで書き始めたんですが、書いているうちに女主人公が非常に一生懸命にやり出したから、私は身につまされてだんだん引き込まれてしまいました。自分の子どもを幸せにするためには、東大法学部に入れなくてはいけない。東大に入れるためにはどこの高校にいかなくてはいけない、どこの高校にいくためにはどこの中学校、小学校、幼稚園、幼稚園前教育、それから幼児の教育……。この若い女性はものすごい勉強家なんで、どうしたらそういう子供を生むことができるか、というところまで遡ってゆくわけです。

生まれてからでは間に合わない、生まれる前からやってかなくちゃならない。彼女は育児書とか教育書とかをものすごく読んだんです。彼女が読んだってことは私が読んだんですが、読んでみて驚きました。そういうものの本は非常に多いし、随分いろいろな研究がなされているんですね。女性が一番頭のいい子供を生む年齢は二十

三歳という統計がでています。その前に結婚していないといけませんから、逆算してその時期に見合いを始めるわけです。

見合いをする時にどういう相手を選ぶか、――連続のテレビドラマにもなりましたしごらんになった方もあると思いますが――見合いの相手に対する最初の質問は「あなたの知能指数はいくつですか」学歴は遺伝しませんけど知能指数は遺伝するだろうと、何よりも先ず聞くわけです。第二の質問は「あなたは今、お仕事に情熱をお持ちですか」仕事に情熱を持っている男性は魅力的なはずだと思いますが、そういう男性は駄目なんです。三番目にする質問は「あなたの趣味は何ですか」男は本を読むのが好きだとか、ゴルフだとか、釣りだとか碁だとか映画だとかいろいろなことを言いますね。そういう趣味のある男は駄目なんです。いい条件で子供を生むために選ぶ相手は、とにかく知能指数だけが高くて、仕事には全然情熱を持っていない、そして趣味はない男でないといけない。これには彼女の考えでは、全部理由があるんです。彼女は見合いをたくさんしてそれにあう男を選びました。知能指数はムヤミに高く、会社の仕事は全然面白くないといってて、趣味は何もない、たまたまそういう男がいて結婚したわけです。そしていろいろ勉強したことを全部生かして食べ物を摂り、男の子を生むような生活をして、大体予定どおり男の子を生みました。では男の子が生まれたら何をするか。実はやることがいっぱいあるんです。頭のいい子に育てるためには、たとえば、家中からデジタル時計を全部なくさなくちゃいけない。数字が読めるようになると、数字をみればすぐわかるので赤ん坊は頭を使わないんです。針で動く時計は針の角度で、何分ということを引いたり足したりしますね、ですから、デジタルをみている赤ちゃんと、針でいつも時間を考える赤ちゃんと頭の働き方が違ってくるわけです。でも、何だか知らないけど動いているような電気時計では駄目で、ゼンマイで動く時計でないといけないんです。一番いいのはそのゼンマイを振り子が巻く時計で、そうやって振り子の運動とゼンマイの運動と、時計で角度を判断する頭の働き、そういうことを全部やって来た赤ちゃんは、デジタルだけみて全然頭を使わなかった赤ちゃんに比べて、随分頭の働きが違ってくるっていうんです。

今、振子の時計を揃えるのはなかなか大変です。御主人に振子の時計を買ってきて下さいといった時に、御主人が会社が忙しいから買いに行けないとか、明日はゴルフに行くから駄目だとか、本を読むから駄目だというのではいけないんですね。ですから仕事に情熱を感じない、趣味は一切ない、そういう御主人でないとうまく行かない。私の小説では、御主人は奥さんの言うがままに振子の時計を買ってくるし、頭のよくなる野菜を何か買って来いといえば買ってくるし、一生懸命奥さんに協力して子育てをやるんですが、ただ一つだけ計算違いが起りました。それは、奥さんが一年足らずのうちにまた子供を妊ってしまったことです。

夫婦は計画してつくった男の子を全力で育てるつもりだったんですが、そういう計算を何もしないで生まれてくる子供ですから頭が悪いかもしれません。そういう子が出てくると邪魔になる。いろいろ迷って夫婦で相談した結果、生もうということになりました。生んでも一切かまわない、いないのと同じようにして扱おう、そして全力を長男に注ごうということをやったわけです。その長男と次男が育っていく過程を、私の小説はずっと描いていったんですが、そ

の結果どういうことになったか、これは皆さん大体は見当がつくと思いますが、長男は駄目になっていき、次男は非常に逞しく、頭のいい子に育っていくんですね。

お母さんは長男に、あなたが社会に出る時に自由に職業を選べる幸せを持つためには東大にいった方がいい。そのために一生懸命に教育している。だから東大を出たときにルンペンになりたければルンペンになってもいい。大蔵省にいきたければいってもいい、何も出世しなさいといってるんじゃない、あなたが自由に選べるように、そのために東大に行かせるんだといっているわけです。そしてとにかくものすごく勉強させてエリートコースを進ませます。子供は勉強しますけれど、生まれながらに頭のいい子はそんなにいるわけありませんから、だんだん苦しくなってきます。そうするとルンペンになってもいいよってとこだけ頭の中に残ってくるんです。ルンペンになるんだったら東大に行かなくてもいいわけで、そういうところで悩みだし、だんだんおかしくなってくる。次男は放ったらかしですから、自分の好きなことだけしてどんどん自分の世界を創り、固めて行きます。それで兄弟の間に争いが起り、非常に悲惨な結果になってくるわけです。

実は地方の新聞の新聞小説として、地方紙のネットワークに渡した小説なんですが、連載していくうちに読者がだんだん心配になってくる。新聞社も心配になってきて一体どうなりますかっていうんですね。最初はユーモア小説で楽しく読んでいたわけですが、読んでいくうちに、そのお母さんがあまり一生懸命やりだして、子供の教育のために化粧もしない、お茶も絶つ、自分を殺してすべてを子供のために注ぎ込む。私もそんなお母さんに同情して、始めはからかうつもりで書いていたんだけれども可哀想になってきて、一生懸命書き込みますからますます読者は引き込まれて読むんですね。読者が一生懸命読んでいるから悲しい結末になっては困るんで、新聞社がどうなりますかって聞いてきたわけです。

私は、長男を殺して、次男は次男でまたひどい目に会うという悲惨な結末を考えていたんですから、大変なことになるよっていったわけですが、そこまでしなくても、私のいいたいことはつきているわけで、多少結末はゆるくしました。テレビドラマはもっとゆるい形になったんですが、悲劇的に終るわけですね。それでテレビドラマを見た人、小説を読んだ人たちから質問が来ました。あの女主人公は、自分のことは考えないで、子供をしあわせにするために一生懸命やってきたのになぜ不幸になるんですか、一体どこが悪かったんですかって、極めて真剣な質問がきたんです。

どこか間違っていたんでしょう。答えは思いつくままにあげると幾つでもでてくるんですが、一つは生まれた子供は全部頭がいいという前提にたっていることですね。私の知っている関西のお金持ちで、百五十頭ぐらい競走馬を買っている人がいるんですが、三代前まで遡って血統を調べて、速い血統の雄と雌をかけ合わせて子供をつくりました。そうしてできた子供を、生まれるとすぐ調教師をつけて走らせる、それを百五十頭やったけれども、大レースに勝った馬は一頭もいなかった。それほどやってもエリートは育たないんです。それなのにパッと気に入った男と結婚して知能指数ぐらいじゃどうしようもないんですね。それは始めから無理なんです。

また子供はそれぞれ全部違います。電車の中で五ツ子を見たことがあるんですが、外ばっかり見ている子、中を動きまわる子、その

子を一生懸命とめようとしている子と、みんな動きが違うんです。一人は運転手に、一人はカメラマンになりたい、女の子は花屋さんになりたい、看護婦さんになりたい、おもちゃ屋さんになりたい、子供は全部好みが違います。それを全部東大法学部にいきなさいってやらせるわけですから、やっぱり間違いなんですね。子供の頃からそれぞれ生き方があるわけですからそれを選んでやらなくてはいけない。二つ目は、心理学にハリネズミ・ジレンマというのがあるそうですが、ハリネズミは愛しあって接近すると、お互いが針で刺しあって相手を殺すことがある。だから愛しあっていたらある程度の距離をおかないといけないんですね。

『カモメのジョナサン』という小説を書いたリチャード・バックという作家にも会ったことがありますが、彼は飛行機乗りですから、離婚したあと飛行機を操縦して好きなところを飛びまわっていて、たまたまラスベガスで降りるから来てくれっていうんで、砂漠の真中のラスベガスで会いました。愛人をつれて降りてきた彼に「お子さんはいますか」って聞いたんです。そしたら彼は「YES AND NO」という返事でした。どういう意味かって聞いたら「自分と別れた妻との間にもうけた子どもはいる」だから YES なんですね。ではなぜ NO かというと「その子どもはまだ小さくて、どういう生き方をするかわからない」っていうんです。つまり親子は世代が違うから生き方も違う。生き方が違うということをお互いに理解しあえるようになってこそはじめて精神的に親子になれるっていうんです。今はまだ理解することができないから NO の状態なんですね。

つまり、違う世界に生きていることを理解できるようになった時にはじめて親子になる。ところが、小説のお母さんは理解も何もしないわけで、自分のところに抱えこんで、自分の設計通りにいかせようというんですから、これもやっぱり間違っているんです。お母さんは、そういう実験教育というところでしかものを見ていない、そこだけに人生の顕微鏡、あるいは虫めがねをあててみている。これはお父さんの方が注意しなきゃいけない。お母さんは子どもに、私のいう通りについてきなさいといって、子どもに目隠しをさせて、自分は虫めがねをはめて街へ出ていくわけですから、これは交通事故に遭うにきまっている。お父さんもお母さんのいわれるままに、同じように虫めがねをはめて街へ出ていきますから、親子皆で車にハネられちゃう。だからお父さんはお父さんの生き方、自然の生き方をしなくちゃいけないということです。

とかくお父さんは粗大ゴミ風に扱われて、評価されるのは一年に一日だけという運命にありますが、ではお父さんの自然の生き方とはどういうことか。『限りなく透明に近いブルー』を書いた村上龍という作家とこういう話をしたことがあるんです。彼は九州にいた高校生のときに事故をおこして家に居られなくて東京へ出て来ちゃったんですね。そうすると、高校の校長をしていたお父さんからハガキが来るんです。不良少年になったお前のおかげでお父さんは辛い思いをしているよ、という風なハガキかというとそうじゃないんです。そんなことは全然書いてなくて、ただ町の様子が書いてあるだけなんですね。一週間経つとまたハガキがくる。お母さんがこうしたとか、お前の友だちはこうだということしか書いてありません。で、村上龍は返事を書かなかった。返事を書かないままに、七年間にわたって二千通のハガキがお父さんから来たんです。これが

お父さんなんです。

私の経験でいくと、私が大学にいる時、母から三通ぐらいハガキがきて返事を書かないと電話がかかってくるんですね。お前どういう了簡かって。親が三回も手紙を書いているのにどうして返事をくれないのかって怒られたんです。でも村上龍のお父さんは何もいわないで、七年間にわたって二千通の手紙を書いた。これは立派なお父さんです。そのお父さん自身が本を書いていますが、お父さんにいわせれば、自分は普通の人間だっていうんですね。家ではみんながお母さんお母さんっていって、自分を全然評価してくれない。一体、子どもたちは家では何の話をしているかと思って、早退きして押し入れに入って聞いていたっていうんです。そうしたら、帰ってきた子どもたちがしゃべっていることのなかに全然お父さんのことは出てこなかった。世のお父さんって皆そうだ、それでいいっていうんです。

でもやっぱりお父さんにしか出来ないことがあります。たとえば押し売りが来た時に追い返す、あるいは煙草の輪をつくれる、そういうことが出来た時に、お母さんはそれをバカにしてはいけないっていうんです。あー輪ができた！　って子どもが感心しているときに、何をバカなことやってんのなんていったんじゃ駄目だっていうんですね。夫婦の思いやりで、お父さんをあるがままに評価しなさい。私なんかもそう思います。

家へ帰ってきて元気ハツラツとしているお父さんはやっぱりどこかおかしい。疲れ果ててバタッとなるのがほんとうのお父さん、っていうと変ですけど、それが普通なんで、さっきいった小説のお父さんは家へ帰ってくると元気ハツラツで、教育パパになるわけですから、こういうお父さんは駄目なんです。

それから、お母さんが自分の子どものことは全部知っていると思うのも間違いです。母なるがゆえに死角、見えない部分がいっぱいあるんですね。そのことにもこのお母さんは気づいていない。それからまた、大きな間違いは、家庭というものに対する考え方です。

さっきのリチャード・バックの言葉でいえば、――彼は飛行機で雲の上を飛んであちこち行ってますからなかなかつかまらなかったんですが、会った時に、最初に一体あなたのホームはどこだってきいたら、彼は笑って、自分のホームは雲の上だっていうんですね。人間が一番心の安らぎを感じる場所をホームという、ただ、家があって子どもがいて家族がいるだけでは、それをホームとはいわないというんです。で、自分が一番心の安らぎを感じるのは雲の上だから、雲の上が自分のホームだ。つまり、ホームというのはそういうものなんですね。では、さっきの『素直な戦士たち』の子どもにとってはどうだったのか。家へ帰ってくるとすぐ勉強々々、塾へいきなさい、むしろ学校にいた方が気楽だ、それでは困るんですね。やっぱり家が一番心の安らぎを感じる場所にしなくてはいけないっていうことです。こうしてあげただけでも五つも六つも間違いがでてくることを説明したわけです。

小説を書こうと思ったら、まわりにはいっぱい材料があるわけですから、そういうものを手掛かりにして、ただみて書くだけじゃなくて、自分なりに足で歩き、調べ、考えて、自分なりの世界を創るというところから始めてください。たいへんまとまりのない話になりましたが、時間も過ぎましたのでこれで終ります。

（昭和六十二年六月二十七日、第二十二回・文芸学会の講演から）